



さいとう あつし 齋藤 淳先生
東京歯科大学歯周病学講座教授、日本歯周病学会専門医・指導医

1989年東京歯科大学卒業。1993年東京歯科大学大学院歯学研究科修了。齋藤歯科副院長を経て、2011年より東京歯科大学歯周病学講座教授、講座主任。2021年東京歯科大学大学院歯学研究科長、日本歯周病学会副理事長。

歯周病の発症と進行、リスクファクター

歯周病予防のため、年に1、2回は歯科医院で定期検診を受けましょう。

歯周病は全身の病気と深い関わりをもつといわれています。日本歯周病学会にご協力をいただき、歯周病についてのお話をうかがいます。第4回は「歯周病の発症と進行、リスクファクター」です。

リスクファクターとは

歯周病（歯肉炎、歯周炎）の発症と進行には、「リスクファクター」が深く関わっています。リスクファクターとは、「病気の発症、進行を修飾・促進する因子」のことであり、存在すると、病気が発症する可能性が高まります。

歯周病の原因は、デンタルプラーク中の歯周病原細菌とそれに対する私たちの体の反応（宿主免疫応答）とのバランスの乱れです（図1）。多種多様なリスクファクターが歯周病の発症と進行に影響を及ぼします。歯周病のリスクファクターは、主に3つの因子に分けられます（図2）。

細菌因子

歯周病の原因である歯周病原細菌が含まれます。歯と歯肉の間の隙間（歯肉溝、ポケット）内のプラーク（図3）から検出される代表的なものを表1に示します。聞きなれない名前ばかりかもしれませんが、歯周病原細菌の種類や量は、人によって様々ですが、その多くは酸素を嫌う、嫌気性菌です。これらの細菌は様々な病原因子を持っていたり、作り出したりして、歯周病の発症や進行に関与します。

宿主因子

免疫応答や病気、遺伝などが該当します。頃の生活でも、体調が悪い時は、歯肉の調子も悪いと感じたことのある方もいるのではないのでしょうか。体調が悪い時は、細菌に対する免疫応答も低下しますので、歯周病が発症したり、

進行しやすくなったりします。病気のうち代表的なものは、糖尿病です。糖尿病にかかっている方は、適切な治療を受け、血糖をコントロールすることで、歯周病のリスクも下げることができます。逆に、歯周病は糖尿病のリスクファクターでもあります。他にも歯周病のリスクとなりうる病気はたくさんありますので、治療を受けましょう。

環境因子

環境因子のなかで最大のリスクといっているのが喫煙です。喫煙は、歯とそのまわりの組織（歯周組織）に悪影響を及ぼします（表2）。また、歯周病の治療効果も妨げます。日本で盛んにマーケティングされている新型タバコも例外ではありません。あらゆるタバコ製品とは、お別れしましょう。また、ストレスをできるだけ減らさないようにすることも大切です。

リスクファクターのコントロール

歯周病は他の病気よりも、自分で改善できることが多いです。その代表がプラークです。歯ブラシやデンタルフロスなどを使用し、正しいプラークコントロールを行いましょう。タバコを吸う方は、自分と家族のためにも、ぜひ、禁煙にチャレンジしてください。歯科医院ではブラッシング指導や禁煙支援も行っているのので、定期的な受診をおすすめします。

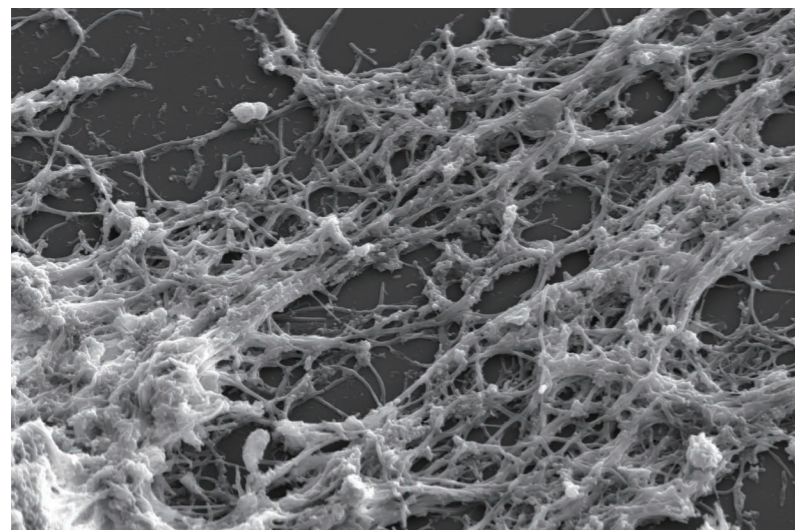


図3 歯肉縁下プラークの走査型電子顕微鏡画像
(東京歯科大学微生物学講座 国分栄仁先生提供)

表1 歯肉縁下プラーク中の主な歯周病原細菌

<i>Porphyromonas gingivalis</i> (ポルフィロモナス・ジンジバリス)
<i>Treponema denticola</i> (トレポネマ・デンティコラ)
<i>Tannerella forsythia</i> (タナレーラ・フォーサイシア)
<i>Aggregatibacter actinomycetemcomitans</i> (アグリガティバクター・アクチノミセテムコミタンズ)

表2 喫煙による悪影響

対象	影響
歯肉の血管	血液の流れを低下させる
白血球	機能を阻害する
線維芽細胞	機能を阻害する
細菌	プラーク中の酸素を減らし、嫌気性菌が増える
免疫・炎症	バランスを乱す

図2 歯周病のリスクファクター

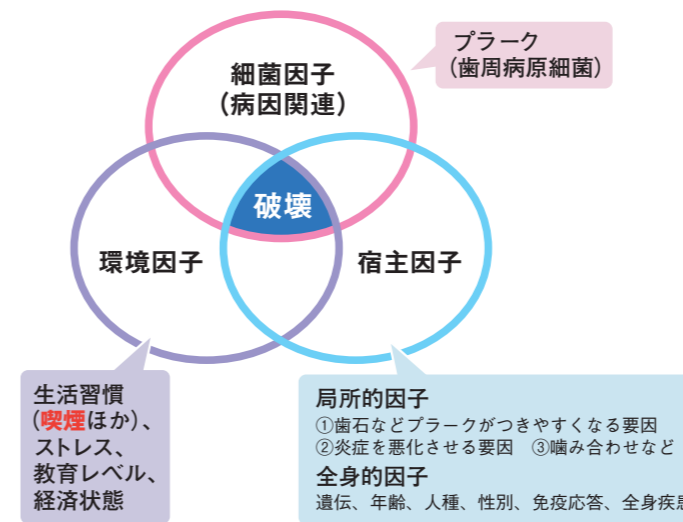
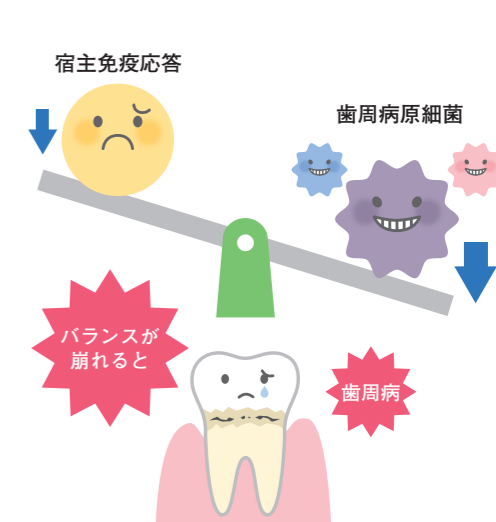


図1 歯周病の発症



次号は「歯周病と喫煙」です。